

## 私たち大人にできることは?

### 多様な体験を土台とした 子どもの成長を支える環境をつくること

将来、社会を生き抜く資質・能力を身につけた大人になるためには、子どもの頃から様々な活動に挑戦し、多様な経験を積み重ねていくことが必要です。そのためには、周りにいる大人が、子どもの生活環境の中に意図的、計画的に多様な体験の場や機会を作っていくことが大切になります。

### Point 1

### 「多様な体験を土台とした子どもの成長」を支える環境とは?

青少年に対し、社会的自立に向けた健やかな成長を促していくためには、家庭や学校、地域といった様々な場面で発達段階に応じた多様な体験を提供し、それらの経験を通じて心身ともに健全な人間形成を支援していくことが大切です。

国立青少年教育振興機構では、「体験活動を通じ

た青少年の自立」を目指し、青少年が社会的に自立していくために必要な子どもの頃の体験や体験によってはくまれる資質・能力の関係について調査研究を重ねてきました。そして、これまでの研究成果を基に、自立した大人へと成長する過程において大切になる子どもの頃の体験と、将来、社会を生き

抜くために必要となる資質・能力の関係を体系的に整理し、今後、子どもの生活環境の中に意図的、計画的に多様な体験の場や機会を作っていく際の指標になるよう関連機関に呼びかけ、望ましい体験の在り方の枠組みとして「子どもの成長を支える20の体験」と「体験を通して育成したい12の資質・能力」を取りまとめました。

### 多様な体験を土台とした子どもの成長を支える環境



## Point 2

### “体験する”ということの考え方

子どもの頃に多様な体験をすることは、子どもの成長にとって大きな意味があります。しかし、いくら様々な体験をしても、ただ体験させられるだけでは得られる成果が少なかったり、意味を成さなかったりすることもあります。子どもの成長を支える体験として**20の体験**を示しましたが、これらの体験を子どもにさせれば、社会を生き抜くために必要な資質・能力が自然と身につくということではありません。

“体験する”ということは、何かしらの活動（自然体験、遊び、学習等）や行為（人助けをする、けんかする等）を“すること”だけを意味するのではなく、その活動や行為を通じて得られる感情（うれしい、感動、悲しい、悔しい等）や気づき（分かる、発見する等）、学び（理解する、できるようになる等）など、いわゆる**体験の質に関わる部分も含まれています**。また、“体験する”ということには、自らが動いたり働きかけたりする**能動的な体験**だけではなく、他者からの働きかけ（認められる、叱られる等）など**受動的な体験**も含まれてきます。

つまり、“体験する”ということとは、何かしらの活動や行為を能動的又は受動的に行い、それを通じて得られる感情や気づき、学びを含んだ一連の流れを表しているといえます。そして、こうした体験を通じて得られる感情や気づき、学びこそが、子どもの成長を促す大きな糧になると考えられているのです。



## 人との かかわり

### 家族とのかかわり

家族にはめられる、親に叱られる、親に勉強をみてもらう、家族と遊ぶ、親にしつけられる、親と将来の話をする、家族の看病をする、兄弟の世話をする等

### 先生とのかかわり

※教師、指導者等

先生にはめられる、先生に叱られる、先生に相談する、先生に認められる、先生に仕事を任せられる、先生と遊ぶ 等

### 友達とのかかわり

※同級生、先輩、後輩等

友達にはめられる、友達に注意される、友達から認められる、友達から尊敬される、友達と遊ぶ、友達とけんかする 等

### 地域の人とのかかわり

※保護者や先生以外の大人等

地域の人にほめられる、地域の人に注意される、地域の人に相談する、地域の人に認められる、地域の人に遊んでもらう、地域の人に勉強をみてもらう 等

## Point 3

### 子どもの成長を支える環境づくりの視点

#### 視点 1

**体験の内容**  
どのような体験をさせるのか？

#### 視点 2

**体験の時期**  
いつ体験させるのか？

#### 視点 3

**体験の質**  
どのように体験させるのか？

#### 視点 4

**体験を通じた人とのかかわり**  
体験を通してどのように関わるのか？

子どもの成長を支える環境づくりを考える際、それは子どもたちが夢中になって取り組める活動なのか、それで子どもたちが心を動かされるような体験（楽しい、うれしい、感動、つらい、くやしい、負けたくない等）ができるのか、そのことを通じて子どもたちがどういった気づきや学びが得られるのかなど、**体験の質**に目を向けることが大切です。

質の高い体験をさせるためには、子どもに体験をただ「やらせる」のではなく、「やろう」という気持ちを引き出すことが必要です。**主体的な学び**は、子どもの成長にとって大きな糧になるものではありません。そうした主体的な学びの姿勢を促すためには、体験を通じて何かを「教える（伝える）」よりも、「**分かる（気づく）**」ことができる機会を設けることが大切です。自分の力で得た学びは、教えられて得た学びに比べ、喜びや充実感も大きく、さらに知りたい、学びたいという意欲を喚起することにもつながります。



また、**子どもの成長を支える環境**では、親や先生、近所の人といった大人とのかかわりも重要な要素の一つになります。そのため、子どものまわりにいる大人は、子どもたちに体験の場や機会を提供するだけでなく、温かく見守りつつも、様々な体験を通じて子どもを認めたり、励ましたり、悩みを聞いたり、時には叱ったりしながらうまく関わり合いをもつようにし、心の成長を促す働きかけを積極的に行っていくことも必要になります。

今後、子どもの成長を支える環境づくりを考える際は、どの時期に、どういった体験をさせるのかということだけでなく、**どのように体験させるのか、体験を通じて大人がどう関わるのか**といった**体験の質や体験を通じたかかわり**についても目を向けることが大切です。



出典

『子どもの成長を支える20の体験』（独立行政法人国立青少年教育振興機構／令和5年度更新版）  
<https://www.niye.go.jp/wp-content/uploads/2024/04/kodomoseityo2024.pdf>